横浜市立 岸谷小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 4 ～ 6 年度 ）

重点取組分野	令和 4 年度 具体的取組	令和 4 年度 自己評価結果	総括
授業改善	「自ら追究する力」を育成するために、今年度は教科を2教科に広げる。子どもの言語能力を高めることに重点を置き、教師が問題発見・解決の授業づくりをし、それをきっかけに、「解決すべき問題は何か。」や「そのためにどうするか」など、自分の考えを表現したり友達と互いに考えを深め合ったりするための言語能力の育成を目指す。子どもが思わず解きたくなるような授業づくりをし、課題に対して進んで粘り強く取り組む姿勢や協働的に行動しようとする力の育成を目指す。	今年度は教科を2教科に広げて取り組んだが、国語においては領域を統一しなかったため、言語能力においては大きな変容は見られなかった。しかし、教科横断を通して問題を解決するための話し合いが深まり、問題発見・解決を目指すための教師の授業力は向上した。算数においては、子どもの実態に合わせる授業展開に課題はあったが、教科横断的な学びは深まった。	B
道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、道徳科を要として学校の教育活動全体を通して行う道徳教育を推進する。 ②自分の思いを書いたり、話したりする活動の中で自分自身を見つめたり、なりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。 ③授業参観では道徳の授業を年１回以上の公開とし、学校での取り組みを保護者と共有し、連携強化を図る。	①どのクラスも、道徳科を要として道徳教育を推進することができた。総合の授業で地域の方と関わるなど、教育活動全体を通じた道徳教育を意識した。 ②各教科を通して、友達の考えのよさを伝え合うことが、自分のよさについて気付くことにつながった。 ③授業参観では、年１回の道徳の授業を公開し、学校での取組を共有することができた。	B
健康教育	①体力づくりタイムやロング昼休みを週に1回設定し、運動時間を確保していく。 ②週に一度の「体力づくりタイム」で運動委員会による体力づくりを行う。 ③学校保健委員会では、休み時間に外遊びをして元気よく体を動かすことができるよう呼びかけを行う。	①体力づくりタイムやロング昼休みでは、週に1回設定し、運動時間を確保することができた。 ②長縄や短縄で週に1度は、校庭で運動する時間を設けることができた。 ③学校保健委員会では、子どもたちの体力向上のために室内遊びの提案やクラス・委員会における取組について話し合い、学校全体で外遊びを推進した。	A
自分づくり教育（キャリア教育）	①総合的な学習の時間などで地域で体験的に学ぶ機会を設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高められるような活動を行う。 ②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、子ども自身の変容や成長を自己評価できるようにする。	①地域の商店の方々との関わりを通して、まちの中で自分たちにできることを考え、実行することができ、自己有用感を高めることができた。 ②自分づくりパスポートは、年度当初にめあての設定を行い、行事等定期的にふりかえりを行っているが、家庭への周知や連携が足りなかった。	B
いじめへの対応	①日常に潜むいじめについて積極的に認知し、子どもの心情に寄り添うことを徹底する。②児童の問題行動や指導の記録を取り、必ず1週間に一度、専任・養護教諭・管理職で情報共有する。③月1回以上定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認を丁寧に行うことで再発防止に努める。④年3回のいじめ防止研修を実施して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。	①子どもや保護者からの訴えに耳を傾け、積極的に認知し、対応やその後の経過の観察まで丁寧に見とることができた。②各学年で細かに記録をとり、管理職等と速やかに情報共有できた。③月２回いじめ防止対策委員会を実施し、全教員で認知した案件について情報共有し、未然防止について考えた。④YPアセスメントを活用しいじめ防止に向けた研修を実施した。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の職員を中心にステップアップチームを組織し、月1回程度の活動を継続して行い、年1回の授業研を行う。職員会議では研修での学びについて発表を行う。②打合せや職員会議がない週は、学年主任が集まる会をもち、ミドルリーダー等が全体を見通して学校運営していく場を設定する。③ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。	①ステップアップチームででは、月に1回集まり、情報共有等をし、授業研の検討・振り返りは随時行った。職員会では、自分の得意分野や研修で学んだことを職員に伝えることで提案力を高めた。②学園主任会では、打合せ事項の確認程度にとどまり、運営への意識を高められなかった。③ICT化による働き方改革はある程度しているがまだ検討の余地がある。	B
地域連携	①学援隊の方々や地域の方々による登下校時の見守り活動について、学校運営協議会で協議をして、安全対策の充実を図る。②「学援隊よろしくお願いしますの会」や「学援隊感謝の会」を通して、地域の方々の協力を知ったり、感謝の気持ちをもったりできるようにする。	①学援隊運営協議会で、安全面についてご意見をいただき、児童の安全確保に役立てた。②「学援隊よろしくお願いしますの会」や「学援隊感謝の会」の効果もあってか、学援隊に対して、挨拶や感謝の言葉を言える児童が増えた。	B
特別支援教育	①校内の特別支援教育委員会を中心に、専門機関や保護者、地域と連携しながら、実態や支援の方向性等の情報を共有し、子どもの見取りや支援・指導を組織的に行う。 ②個別支援学級、国際教室、専科制授業、岸谷SR（スタディールーム）など多様な学びの場を充実させるとともに、一般学級も含めより一人ひとりに応じた支援を充実していく。	①個別の教育支援計画・指導計画を活用し、特別な支援を必要とする子どもの実態や目標について職員全体で共有した。②必要に応じて特別支援委員会を開催し、多様な学び場の中から適切な場で一人ひとりのに応じた支援が行えるようにした。 　校内通級教室を新設し、不登校児童への対応をすることができた。	A
児童生徒指導	①「学校のきまり」が、現在の社会情勢に沿うものであるか検討し、「学習スタンダード」と「生活スタンダード」に分け、分かりやすい表現にする。また随時、検討・修正・改善を行っていく。②職員会議内に児童理解の内容を定例化し、児童の状況を共通理解する。③「Y-Pアセスメント」を活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実践する。④不登校児童、家庭へのこまめな連絡をし、学習の支援の在り方を探り、学びが継続できるようにする。	①定期的に岸谷スタンダードの見直し検討を行い柔軟に改善することができた。②職員会議内で各学年の児童の様子を共有し、共通理解をもって指導に当たることができるようにした。③YPアセスメントを活用し、プログラムを実施したり、個別の支援や指導に活かしたりした。	B
多文化共生	①外国の言語や習慣、食べ物等を紹介することで、全校児童の多文化共生の取組を推進する。②外国につながる児童の支援のため、国際交流ラウンジやボランティア団体などの関係機関との連携を図る。③外国につながる児童一人ひとりの日本語習得状況を踏まえた適切な学習指導を行い、生活面・学習面ともに豊かで楽しい学校生活を送ることができるよう支援していく。	①国際理解教室を通して、外国の生活や習慣などに触れ、外国の文化に親しむことができた。②転入児童や新入学児童に向けてのみでなく、普段から必要性を見取って積極的に各種関係機関との連携を図るようにしていく。③特別支援教育の一つとしての国際教室を中心に、個に応じた取り出し指導や入り込み指導を行った。保護者、在籍学級担任、国際教室担当等の連携を更に強化していく。	B
ブロック内評価後の気付き	特別支援教育を柱にして、一人ひとりに応じた教育・指導ができるようになってきた。コロナ禍にあっても、体力づくりを目指す取組を継続的に行って、学校保健委員会に向けての話合いの中で、自分の体を大切にする意識が生まれてきている。いじめへの対応については、道徳教育による豊かな心の育成を目指したが、まだ、課題が残る。今後も継続的な取組をしていく必要がある。		
学校関係者評価	学校運営委員の皆さんに授業参観をしていただき、全体的に子どもが落ち着いており、ICTの活用がされていること、板書計画がしっかりとなされており、板書を見ればその時間のめあてや学習活動がすぐにわかるようになっていることなどについてよい評価をいただいた。また、総合的な学習で、「まち」との関わりに取り組んでいる学年がいることについて、まちの活性化につながり、コロナ禍において行事が思うように実施できない中で地域と子どもたちがつながることができると高評価をいただいた。		
中期取組目標振り返り	授業改善については、今年度の振り返りの中で、教科横断的な学びの視点を授業に取り入れることへの意識が高まってきているため、その視点に代わって「主体的に学ぶ」子どもを育成するような授業づくりについて、来年度は研究を進めていきたい。学校目標のきぼう・しあわせ・やさしさについて、「希望」「幸福」「他愛」と漢字で表現していたが、来年度から「他愛」を「優愛」に変更する。子どもたちが、自分自身を大切にし、周りの人、まちのことを大切にし優しくできるよう、地域・学校・保護者の三者が一体となって見守り、支援していきたい。		

重点取組分野	令和 5 年度 具体的取組	令和 5 年度 自己評価結果	総括
授業改善	各学年の実態によって、問題発見解決の授業展開を目指していく。テーマに沿った授業デザインを行い、教科は国語・算数を継続する。また、児童の主体性を伸ばすことを軸とする。言語能力においての設問を一年間だけで終えるのではなく、継続して長期にかけて変容をみる。引き続き、教師の授業力向上を目指し、授業研究を行う。		
道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③各教科で、自分の考えを伝え合うことを大切にし、考え方の違いに気付けるようにする。④相手意識、思いやりの心を育むことを教育活動にすべて絡めて実践する。		
健康教育	①体力づくりタイムやロング昼休みを設定し、運動時間の確保を行う。②週に一度の「体力づくりタイム」で運動委員会による体力づくりを行い、運動に親しむ習慣をつける。③学校保健委員会では、休み時間の外遊びや体力テストの記録の向上を目指すことで、総合的な体力づくりに取り組む。④体力テストの記録を6年間しっかりまとめ、自分の体についての意識をもたせる。		
自分づくり教育（キャリア教育）	①総合的な学習の時間などで地域で体験的に学ぶ機会を設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高められるような活動を行う。②「自分づくりパスポート」を家庭と共有して活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、子ども自身の変容や成長を自己評価できるようにする。		
いじめへの対応	①日常に潜むいじめについて積極的に認知し、子どもの心情に寄り添うことを徹底する。②児童の問題行動や指導の記録を取り、必ず1週間に一度、専任・養護教諭・管理職で情報共有する。③月1回以上定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認を丁寧に行うことで再発防止に努める。④年3回のいじめ防止研修を実施して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。⑤校内ケース会議を、案件の内容によって柔軟に行う。		
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の職員を中心にステップアップチームを組織し、月1回程度の活動を継続して行い、年1回の授業研を行う。職員会議では研修での学びについて発表を行う。②打合せや職員会議がない週は、学年主任が集まる会をもち、ミドルリーダー等が全体を見通して学校運営していく場を設定する。③ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。		
地域連携	①学援隊の方々や地域の方々による登下校時の見守り活動について、学校運営協議会で協議をして、安全対策の充実を図る。②「学援隊よろしくお願いしますの会」や「学援隊感謝の会」を通して、地域の方々の協力を知ったり、感謝の気持ちをもったりできるようにする。③地域の材を生かした学習を展開し、「人、たりできるようにする。③地域の材を生かした学習を展開し、「人、こと、もの」のつながりを深めていく。		
特別支援教育	①校内の特別支援教育委員会を中心に、専門機関や保護者、地域と連携しながら、実態や支援の方向性等の情報を共有し、子どもの見取りや支援・指導を組織的に行う。②個別支援学級、国際教室、専科制授業、岸谷SR（スタディールーム）、校内通級（ひだまり）など多様な学びの場を充実させるとともに、一般学級も含めより一人ひとりに応じた支援を充実していく。		
児童生徒指導	①「学校のきまり」が、現在の社会情勢に沿うものであるか検討し、「学習スタンダード」と「生活スタンダード」に分け、分かりやすい表現にする。また随時、検討・修正・改善を行っていく。②職員会議内に児童理解の内容を定例化し、児童の状況を共通理解する。③「Y-Pアセスメント」を活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実践する。④不登校児童、家庭へのこまめな連絡をし、学習の支援の在り方を探り、学びが継続できるようにする。⑤児童支援ノートを各学年用意し、記録をしっかりとって情報共有する。		
多文化共生	①国際理解教室では、外国の生活や習慣などを紹介することで全校児童の多文化共生の取組を推進する。②外国につながる児童一人ひとりの日本語習得状況を踏まえた適切な学習指導を行い、生活面・学習面ともに豊かで楽しい学校生活を送ることができるよう支援していく。③国際教室担当が中心となり関係児童の教室に入り、寄り添い、支援する場面を、他の児童が当たり前のように受け止め、理解が進むようにしていく。		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和 6 年度 具体的取組	令和 6 年度 自己評価結果	総括
授業改善	c1		
道徳教育	c2		
健康教育	c3		
自分づくり教育（キャリア教育）	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
地域連携	c7		
特別支援教育	c8		
児童生徒指導	c9		
多文化共生	c10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			